

少年野球の弊害について

川那辺 寛晃 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 金田 安正

キーワード：少年野球，勝利至上主義，指導法

1. はじめに

近年の日本野球は非常にレベルが上がり、世界でもトップクラスの成績を収めることが当たり前になってきた。しかし、レベルの上昇に伴い顕著になってきたことは、少年野球における大人の過剰介入による勝利至上主義である。本来子どもが楽しく野球をするはずである少年野球の現場で勝利至上主義が横行することで、子どもが少年スポーツの段階で辞めてしまうようなことがあってはならないのではないか。親、スポーツ少年団の指導者は非常に重要な役割を担っていると考えている。

そこで、この問題を解決するためには、どのようなスポーツ少年団の活動をするべきか、子どもの心理、指導者のあり方、親のあり方、少年野球の現場に着目し、その意義を明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 研究方法

文献で現状や課題を調査し、実際に少年野球の現場を訪問し、見学、質問を行った。

3. 結果と考察

少年野球で第一に目標にしたいことは、子どもに「野球を好きになってもらうこと」である。しかし、大人は勝つことにこだわり、子どもを機械的に指導してしまうという現状がある。勝利にこだわるのは子ども自身であるべきで、勝敗を度外視してでも、思い切り投げさせる、思い切りバットを振らせるという少年野球の原点を大人は忘れてはいけない。

また、子どもは成長期にあり、その運動能力

はまさに伸び盛りである。野球においてもそれは顕著に見られるもので、できる子どもとできない子どもがいて当然のことである。それにもかかわらず、大人は他者との比較で叱責、指導をしてしまうことが、その結果、無力感を形成させてしまう。子どもには自分の能力に見合った課題や目標を与え、それを達成させることで達成感や成功感を与える必要がある。また、その達成までのプロセスに対する肯定的なフィードバックを与えることも必要である。

失敗したときに怒鳴りつける、脅すような指導は、子どもを必要以上に悩ますことになってしまう。そんなときは、例えば「今のプレーは20点。こうすれば100点だよ」という、次につながる言い方をすべきである。

実際に現場を見て感じたことは、上述したような勝利至上主義は見られなかったが、逆にそれに気を遣いすぎてか指導者が子どもと近すぎるということであった。全体的に子どもはのびのびと野球をしていたが、どこか自由すぎる雰囲気蔓延していた。このような現状では、本当に指導が必要な場面でその効果は薄れてしまう。今一度、指導者と選手という本来の関係性を見直す必要があると感じた。

4. まとめ

大人は子どもの成長を喜び、スポーツをすることで以前より良くなっていることを子どもに伝えてあげる必要がある。大人の事情で子どもがスポーツ活動を辞めてしまうようなことがないよう、これからのスポーツ少年団、少年野球の現場がより良くなることを願っている。